はじめに

二〇二〇年度から実施の「大学入学共通テスト」は、「共通一次試験」（一九七九～一九八九年）、「大学入試センター試験」（一九九〇年～二〇一九年）以来となる大変革です。そもそもこうした入試改革・学習指導要領の改訂が行われる大きな背景として、社会の変容と、そこで求められる人や能力の変容が挙げられます。すなわち、情報化やグローバル化、人工知能の発達といった変容の中においても、予測不可能な変化を前向きに受け止め、社会や人生を、人間ならではの感性を働かせてより豊かなものにしていくことができるような人、能力が求められると同時に、それを育むための学習の転換も進められているのです。

このような転換の中で実施される「大学入学共通テスト」は以下のような大きな特徴を持つだろうと予想されています。

第一は、記述式解答です。「共通一次」「センター試験」がオールマーク式（客観式）だったことからの大きな変化です。もちろん「実績」のあるマーク式の問題を残しながらも記述式を取り入れ、表現力も含むより総合的な学力を測ることに方向を転換するようです。

第二は、その記述式の問題が、論説や小説とは異なる文章を課題文としている点です。例えば、役所が出す街の景観保護に関する文書、不動産会社と取り結ぶ駐車場の契約文書、生徒会規約や生徒会新聞などです。本講座では「実用的文章」と表記しています。「現代文」の課題文としてはほぼ前例のない種類のものと言えます。英語の試験もより「実用的」方向へむかっているのと同様に、抽象的な論説や文学的文章を読むことに加えて、実生活で触れうる文章への対応力を問うようです。

第三は、複数の資料（図表も含む）の読解を求める点です。これは記述式とマーク式の両方にみられるものです。こうした複数資料への対応は、小論文ではよくあるケースでしたが、現代文の試験問題としてはレアケースです。

このように新しい試みが始まろうとしています。スタディサプリではこれに対応する講座を制作するのみならず、右の特徴をもった教材による授業を通じて現代日本語の高度な運用力をつくっていける講座づくりをめざしました。言い換えれば、「共通テスト」のモデル問題や試行テストを教材にしながら、それらの問を解答できるようになることが第一の目的ではなく、それらの教材を通じて高い日本語運用能力を養成することが第一の目標です。今後未知の問題に出会っても揺さぶられることなく、確かな日本語運用能力をもって問題を発見・解決していき、将来学術やビジネスの場で、または社会に対して当事者意識をもつ市民として発揮される力を身に付けてほしいという理念をもった講座です。

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

はじめに　その２　本講座の目的図解

≪本講座の目的≫

高い日本語運用能力を養成し、将来、学術の場・ビジネスの場で、さらに社会に当事者意識をもつ市民として発揮される力を身に付けることを第一目標としています。
具体的には以下のような力を養成したいと考えています。

高い日本語運用能力

表現力：解を実現させる力

【導き出した解や自らの考えを、意図が適切に伝わるように表現できる力】
・設問条件を理解して過不足なくまとめて伝えることができる
　└ 国公立・私立大学の個別試験での記述力
　　小論文や大学入学後の論文作成
・問題発見と解決のために対話と協力ができる
　└ アクティブラーニングのフォーマット

⇅　**相互作用**　⇅

読解力：問題を読み解く力

【読み取った情報から創造的・論理的に思考し、一つの解を導き出すことができる力】
・吟味した情報を踏まえて思考・判断し、適切な解を選択できる
・問題の背景や出題者の意図を読み取ることができる

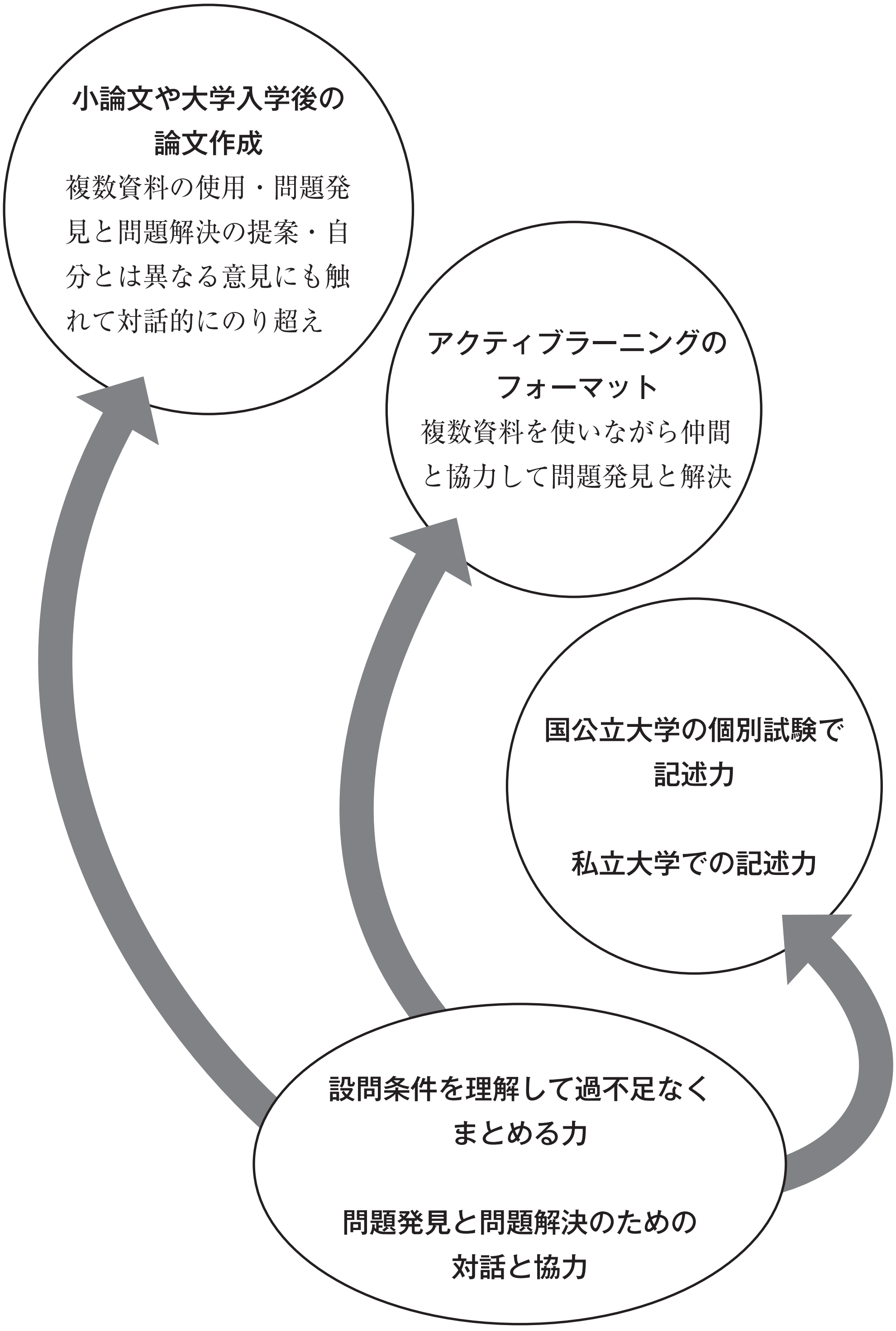
【単なる読書や観賞ではなく設問条件に適合した形で情報を選択し正しく読む力】
・多様な情報を吟味し、重要な情報を読み取り見極めることができる

題材
・説明的文章（論説・評論）
・文学的文章（小説・物語）
・実用的文章
・語彙力（漢字・慣用表現の知識、抽象的な言葉の意味理解）

情報源
・単数
・複数

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

はじめに　その３　実用的文章理解力の詳細



© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ノートの取り方

テキストへの書き込みが基本です。赤／青／緑（黒板では緑ですが、第三の色であれば何色でもＯＫ）の三色をご用意ください。文章の対比を色分けして塗っていきます。主役キーワードが赤、敵役キーワードが青、脇役キーワードが緑です。

解法の手順

……**文章（論説も小説も）は、すべて対比とその言い換えの連鎖からできている。そうであるならば……**

少しでもはやく確実に読解するために

１　本文末の**書名＝タイトルをみる　→　テーマが判明**することが多い。さらには、「○○と△△」というようにいきなり**対比発見のてがかり**をくれることもある（現代文では、書名をつけることは多い。従来のセンター試験現代文では必ず記載されていました）。

２　**設問の傍線部と問題文**をざっと読み、キーワードの見当をつける（**設問は本文のキーワードにかかわることが多い**）。タイトルの次は「キャスティング＝配役＝誰が出演するのか」に注目。本編の前に「エンドロール」を見てしまう感じです。ただし**選択肢まで読んではダメ**。先に読むと歪んだ先入観ができてしまう。

※例外があります。**従来のセンター試験の小説・問６に見られたような「表現」に関する問題**については、**選択肢まで読んでしまい**、どんな表現技法が取り上げられているか**事前チェック**してしまう。その後、本文を読みながら、取り上げられていた通りの表現技法が登場するか確認する。トータルではこのほうがスピーディーです。

３　**本文最後の数行をさきに**目を通し、テーマおよび結論、キーワードと対比の見当をつける。ドラマの最終場面、クライマックスを先に見てしまう感じ。とくに評論・論説で有効です。

４　**本文を冒頭から読み**、設問の傍線部にあたるたびに、選択肢を読み、その時点でしぼれるものはしぼる。ただし問いの約半数は全文を読みとおさないと解答できないから、読んでいる途中で判断できないものは先送りにする。

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

記述式問題解答へのガイドライン

１　**字数指定の八割以上**書くことがのぞましい（「五十字以内で説明せよ」という設問なら四十字以上書く）なお、指定字数の半分（五割）に満たない場合は、採点の対象とならないことが多い（つまり０点）

２　記述解答の採点は、**原則的に加点制（ポイント制）**（キーワード・キーフレーズごとに得点を与える。つまり、余分なことを書いたとしても減点はされないのが普通だから、字数の許す限り、重要と思った語句を記入してやる）

３　**誤字・脱字・略字**はそれぞれ減点（とくに略字は印象悪いよ！）

４　**「理由はなにか」「なぜか」**などの問いかけに対しては、「〜から。」「〜ので。」「〜ため。」など理由を示す語でしめくくる。そうでないと、減点。逆に、理由を求めている設問ではないのに「から」「ので」「ため」でしめくくると減点だよ。

その他解答欄・解答用紙に関する諸注意

a

	人	間	は	…

→　※**「原稿用紙」ではなく「解答欄」**だから最初のマスを空ける必要はない

b

…	…	…	こ	と

→　※**句点なし！**（減点）
設問文に「句読点も字数にかぞえる」とある場合、文末には必ず句点（。）をつける・句読点をかぞえるという指摘がない場合でも、「説明終わり」の印として句点（。）をつけるのが原則
ただし、「抜き出せ」という設問の場合は、当然本文のまま（余分なものは付けない）

c

…	…	…	こ	と。

→　※**句読点は一文字分！**（減点）

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

より本質的な記述問題への解答の仕方〈答案に盛り込むべき要素〉

○具体例は原則としてカット。よりまとまった表現を解答に盛り込むべし！

○対比の表現（ＡではなくＢである）！

○繰り返し、言い換えられている表現は大事。ただし一本化！

抜き出し問題の諸注意……「語」「語句」「一文」などと表記されているものの範囲について

○「語」＝「一単語」・「ワン＝ワード」・「一品詞」（ただし「一文字」とは限らないからね！）

○「語句」＝複数の単語もありうる。「語」よりも広い概念。「部分」と表記されることもある。

○「一文（文）」＝句点（。）で区切られるまとまり。

語 ⇒ 心身

語句 → 心身の一体性

（例）［心身の一体性、すなわち、身体が真に身体としてあるとき、身体は「外部」的ではない。］この考察は、「道具」を見直す契機になる。

［ ］⇒ 一文・文

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1　対比混乱の誤り　……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。あるいは、主役キーワードの説明を求めている設問で、敵役キーワードを挙げている誤り。**キーワードのグループ分け失敗**の選択肢といってもいい。

2　同一性分断の誤り　……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け失敗**。**同質性分断**ともいう。

3　正しい対比喪失の誤り　……本文中で「**A⟷B**」という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手にもちこんだり、「**C⟷D**」といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は「**善⟷悪**」という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4　不当な全称判断　……本文中の記述がないのに、「**すべての○○は**」「**あらゆる○○は**」と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5　不当な限定判断　……本文中の記述がないのに、「**○○のみ**」「**○○だけ**」と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**(わいしょう)があります。例えば本文では「人間関係全般について」書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6　不当な価値判断　（不当な当為(とうい)判断）……本文では「○○である」「○○だ」という事実判断をしているのに、「**○○であるべきだ**」「**○○にしなければならない**」「**○○する必要がある**」と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの比較をしているだけなのに、**Aのほうが優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を遣う必要があるんだよ。

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

7　**部分的指摘の誤り**……本文中では、「**AともにB**」「**Aと同時にB**」「**AしかもB**」と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8　**記述に反する誤り**……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「AはBである」としているのに「AはBではない」としている誤り。

9　**記述なし**……………文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては1～8・10～13のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10　**文脈喪失の誤り**……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11　**物理的スリカエの誤り**……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢**。小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12　**比喩を文字通りに解釈した誤り**……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝（ひざ）がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

13　**具体例は、一段、落ちる**……具体例を挙げている選択肢は、「最も適当」な選択肢を選ぶ際には、選びたくない（ガクっと正解候補から落ちるイメージ）。もっとまとまった語句を盛り込んでいる選択肢が正解になる。

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

予習の仕方……映像授業を視聴する前に、自力で文章を読み、設問に解答しましょう。時間をかけてかまいません。じっくり自分なりの答案をつくりましょう。

☆第二講の予習の前に、第二講チャプター1を視聴しよう！

復習の仕方について……各講には「復習テスト」が付いていて**漢字や語句の意味テスト**になっています。各講で使用した文章に登場した漢字と語句のテストです。これに対応するために、映像授業の各講を視聴した後、みなさんはその文章を読み直してください。その中に出てくる重要な漢字や語句が復習テストになっています。**文章の内容理解を深めながら、どの漢字や語句が出そうかも考えつつ、よ〜く読んでください。**

こうした知識はたいへんに重要です。文章理解を助けてくれるものになります。また、記述問題については、自分の答案に不足はないか、よく確認してください。これが復習になります。

映像授業内で解説した設問について、もう一度解答し直すというタイプの復習は、現代文学習としてはあまりオススメできません。同じ問題を解き直すのではなく、次々と新しい文章問題にアタックしていくほうがよいです。スタディサプリでは数多くの現代文講座を用意しています。これらにアタックしましょう。

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

二〇〇字要約のガイドライン

1　原文の**対比**をくみとる記述にする（「～Aではなく、Bである」「一方はAであり、他方はBである」「一般にはAと考えられがちだが、実はBである」など）。

2　**具体例**は原則として捨象（しゃしょう）（カット）する。

3　比喩的表現よりも**明示的・説明的表現**をひろう。繰り返し、言い換えられている表現は大事。ただし一本化。

4　**短文に切って、接続語でつなぐ**。文相互の関係を明確にする。**「そして」は、できるだけ使用しない**。仮に原文中で「そして」が使われていても、要旨をまとめる要約では、使用しないほうがいい。

5　原文を知らない人が読んでも意味の通る内容にする。

6　筆者に成り代わって、内容自体を書く。したがって、**「筆者は～と言っている」といった表現は不要**。

7　原文の流れ通り（冒頭からの順番通りキーワードを出す）でもよいですが、**最重要のメッセージ、一番大事と考えられる対比箇所**を最初にバーンともってくるまとめがオススメです。

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

おすすめの問題集

『マーク式基礎問題集・現代文・改訂版』（河合出版）
『マーク式総合問題集・国語』（河合出版）……「全統マーク模試」を収録したもの
『Ｚ会・現代文のトレーニング』（増進会出版）……「入門編／必修編／小説編／記述編／私大編」がそれぞれあります。
『入試現代文へのアクセス』（河合出版）……「基本編／発展編／完成編」があります。

おすすめの用語解説集

『読み解くための現代文単語』（シグマベスト・文英堂　小柴大輔　編著）

おすすめの参考書

『小柴大輔の一冊読むだけで現代文の読み方＆解き方が面白いほど身につく本』（ＫＡＤＯＫＡＷＡ）
『東大のヤバい現代文』（青春出版　小柴大輔　著）……一般の方向けの教養書ですが、記述の基本的なノウハウがわかりやすくまとまっているので、東大志望者に限らず記述対策についてもっと学びたい場合はおすすめです。

目次

「大学入学共通テスト」モデル問題例

第一講　マーク式　その１《評論》　テーマ「日本文学論・短歌論」……p.14

第二講　記述式　その１《実用的文章》　テーマ「都市景観の保護」……p.28

第三講　記述式　その２《実用的文章》　テーマ「駐車場の契約」……p.36

「大学入学共通テスト」試行調査（平成29年11月実施分）

第四講　マーク式　その２《評論》　テーマ「都市論」……p.42

第五講　マーク式　その３《小説》　テーマ「幸福な王子」……p.54

第六講　記述式　その３《実用的文章》　テーマ「高校生の部活動」……p.66

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第一講　マーク式　その１

《評論》　テーマ「日本文学論・短歌論」

短歌について書かれた次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】を読んで、後の問い（問１〜５）に答えよ。

【文章Ⅰ】

毎朝起きると、顔を洗い、歯を磨き、料理をして、ご飯を食べる。五感のうちでもっとも幼稚だけれどもっとも根源的なのが触覚であると、彫刻家の高村光太郎が言っていたが、あるいはその根源性ゆえに、私たちは私たちの一瞬一瞬が手指や舌などの触覚によって成り立っていることを普段は忘れがちだ。

触覚が本当に生きている歌というのは、視覚や聴覚の歌に比べると思いのほか少ない気がする、（ア）「琴線に触れる」「やさしさに触れる」といった言い回しがあるように、「触れる」というのは象徴的、観念的に使われることも多い言葉である。短歌でも、何かに「触れる」という歌はたくさんあるけれど、それがすなわち触覚の生きた歌だとは限らないのだ。

一粒づつぞくりぞくりと歯にあたる泣きながらひとり昼飯を食ふ　　河野裕子『歳月』

ひやひやと素足なりけり足(あな)うらに唇(くち)あるごとく落椿(おちつばき)踏む　　同『体力』

触覚の歌人としてまず思い浮かぶのが、河野裕子。こうした歌のなんとなまなましいことだろう。一首目、「ぞくりぞくり」が怖いくらいに肉感的である。神経が昂(たか)ぶっているときの、異様に研ぎ澄まされた感覚だろう。二首目には、裸の足裏にものが吸いつくようなリアルな感じが喩によって再現されている。全身の皮膚は、世界と自分の境目であり、また繋(つな)ぎ目でもある。そのことの面白さを全力で味わうかのような触覚の歌。

こんなにも湯呑(のみ)茶碗(わん)はあたたかくしどろもどろに吾はおるなり　　山崎方代『右左口(うばぐち)』

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

花冷えや夕暗がりにかむ洟がほのかに温してのひらの上に　　島田幸典『駅程』

何かに触れることは、生きている自分自身を確かめ直すことなのだなと思う。手に包み持つ湯呑茶碗や自分の洟の、侘しいような温かさがここにはある。

触れることが命の輪郭をなぞり直すことだとしたら、それは他者の命についても同じだ。自分で自分をくすぐっても何も感じないように、私たちは自分と異なる他者に触れたときに触覚を意識することが多い。ひとの身体に気軽に触れる機会は現代の日本では減ってきているが、例えば介護、出産、子育てなど家族との時間のなかでは、身体に触れることが多いだろう。また、次のような性愛の歌でも触覚が印象的に詠まれる。

君の髪に十指差しこみ引きよせる(イ)時雨の音の束のごときを　　松平盟子『帆を張る父のやうに』

髪のひとすじずつの柔く冷たい感触を「時雨の音の束」に喩えることで、「君」の儚さが切なく立ち上がってくる。触覚を「音」に喩えるというややアクロバティックな比喩でありながら、すっと胸に入ってくる。

［　1　］

［　2　］

いちじくの冷たさへ指めりこんで、ごめん、はときに拒絶のことば　　千種創一『砂丘律』

生きている／生きていた命に触ることは、しばしば怖れや気味の悪さを伴う。それぞれ動詞がリアルに効いていて、日常の破れ目が見えるような怖さがある。

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ひとつひとつの何でもない場面が、触覚を経由することでひりひりと印象づけられる。つまるところ、触覚にはやはり体験の一回性の力強さがある気がする。視覚なら今は写真や映像があるし、聴覚ならさまざまの音源があるが、触覚は基本的に「記録」できない。実際の体験と切り離せない。そんなかけがえのない触覚を、言葉によって再現してやろうという挑戦がある歌、そして、さまざまなものに触れながら生きている自分の輪郭を新鮮に確かめ直すような歌が面白いのではないだろうか。

（大森静佳（おおもりしずか）「わたしの輪郭、いのちの感触」による）

【文章Ⅱ】

（ウ）感嘆おくあたわざる、といった出会いをした聴覚の歌を三つあげよう。

ひたぶるに暗黒（あんこく）を飛（と）ぶ蠅（はへ）ひとつ障子（しやうじ）にあたる音（おと）ぞきこゆる　斎藤茂吉『あらたま』

真っ暗闇の部屋のなかを、迷い込んだ蠅がひとつ出口をもとめて飛び巡っている。ときおり障子にぱしっとあたる重い音――この「音」を何と言いあらわしたらいいかと、もどかしい。

銀蠅などとも言った大きい蠅であろう。「音」には質量がある。ぐしゃりと潰れる生身も感じられる。そんな存在が、暗黒のなか、光をもとめては飛礫（つぶて）のように盲動し、身をうちあててはまた盲動する。あたかも運命であるかのように〈受苦〉するその音。

ニコライ堂この夜揺（よ）りかへり鳴る鐘の大きあり小さきあり小さきあり大きあり　北原白秋『黒檜（ひ）』

初めてこの歌を知ったとき、文字通り感嘆した。教会の鐘の音がまるで耳元で鳴っているようだ。「この夜」は特別の夜、題にあるように降誕祭前夜。「大きあり小さきあり」の繰り返しだけでは単調に終わるところを「小さきあり大きあり」と続けて、言葉そのものが鐘の響きとなっている。なんと言ってもすごいのは「揺りかへり」。実際に作っていると、これが出ない。これがあるから、下の句が生きてくる。

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

空の日に浸みかも響く青々と海鳴るあはれ青き海鳴る　　若山牧水『海の声』

まっ青な空。日は高々とさしのぼる時刻、目をつぶって寝転ぶ。まぶたの裏は日のひかりであかるい。海鳴りが聞こえる。なんと空の日に滲み入るように響くものか。青々と海が鳴っている。青い海が鳴るよ。

明るくて気持のよい、うつくしい青の響くような歌。青の色彩と響きとが溶け合っている。「青々と海鳴るあはれ青き海鳴る」の繰り返しが絶妙だ。「青々と――鳴る」だからこそ、海から空へとひろがる青の空間が生まれた。さらに「青き海」と言いかえて単調にせずうたいおさめていく。

（エ）右三首のうち白秋と牧水の歌は、作りが似ている。白秋「揺りかへり鳴る鐘」も牧水「空の日に浸みかも響く」も、三次元空間をもたない。揺れる鐘も、空の日も、読者には視覚的刺激をともなって想起されるけれども、言葉の組み立ては三次元的ではない。歌全体が聴覚と化したようで、響きそのものになって拡がっていくようだ。それは、茂吉の、すべてが「音」に集中する歌と比べればよくわかるだろう。茂吉の歌は、灯を消した暗い部屋という現実の三次元空間を「ひたぶるに暗黒を飛ぶ」と真っ黒に塗りつぶした。だからこそ耳は「音」に集中して異次元へと誘われる。

みづうみの氷に立てる人の声坂のうへまで響きて聞こゆ　　島木赤彦『氷魚』

この歌は、聴覚をもって一首を統合し、三次元空間を見せたところに新鮮さがある。地形と作者との位置関係が明確で、空間が感じられる。冬の澄んだ空間に固く響く声の反射が聞こえてきそうだ。

赤彦たちは、三次元空間の現出を「写生」という語によって探求した。それゆえ歌はどうしても視覚中心になる。聴覚をもって一首を統合しなければならない場合にも、視覚が干渉してきやすい。

大きなる風音となれり目のまへに曇り垂れたる冬田のおもて　　島木赤彦『太虚集』

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

「大きなる風音となれり」なんて言ったって、少しも風音は聞こえてこない。視覚把握による「目のまへに曇り垂れたる冬田のおもて」はよく見えるが、音に関してはまったく索漠たるものだ。大きな風音になったとただ説明しているだけである。かの島木赤彦にして、こうだったのである。

（阿木津英（あきつえい）「『写生』と聴覚」による）

問１　傍線部（ア）～（ウ）の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

（ア）　琴線に触れる
① 落ち着き安堵させること
② 失望し落胆させること
③ 感動や共鳴を与えること
④ 動揺し困惑させること
⑤ 怒りを買ってしまうこと

（イ）　時雨
① 春の、特に若芽の出る頃、静かに降る細かい雨
② 昼すぎから夕方にかけて、急に曇ってきて激しく降る大粒の雨
③ 一しきり強く降ってくる雨
④ 秋の末から冬の初め頃に、降ったりやんだりする雨
⑤ みぞれに近い、きわめて冷たい雨

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

（ウ）　感嘆おくあたわざる
①　感嘆せずにはいられないこと
②　感嘆してはいられないこと
③　感嘆する余裕がないこと
④　感嘆するか迷ってしまうこと
⑤　感嘆することもありうること

問２　**【文章Ⅰ】**の**空欄１、２**について、筆者がここに引用した短歌を次の①〜⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

①　悲しみの単位として指さす川にはなみずき散りやんでまた散る　服部真里子『町』
②　ぬめっとるまなこに指をさし入れてゆびが魚をつきやぶるまで　吉岡太朗『ひだりききの機械』
③　触れることは届くことではないのだがてのひらに蛾を移して遊ぶ　大森静佳『てのひらを燃やす』
④　足のゆびはおろかにし見ゆ湯あがりの一人しばらく椅子にゐたれば　河野愛子『夜は流れる』
⑤　遠くまで来てしまひたり挽き肉に指入るるとき今も目つむる　朝井さとる『羽音』
⑥　風よりも静かに過ぎてゆくものを指さすやうに歳月といふ　稲葉京子『柊（ひいらぎ）の門』

問３　**【文章Ⅰ】**で示された「触覚」の説明として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。

①　生きているものに触れることの恐怖感や不気味さを克服して、その真の姿を知ること。
②　記録する媒体に頼ることなく、たった一度の経験を自ら記憶し続けること。
③　何かに触れるリアルな体験により、自他が一体化した感覚を強く意識すること。
④　視覚や聴覚による認識をこえて、対象の本質に深くせまろうとすること。
⑤　直接触れる実体験を通して、何気ない生活場面や自らの存在を鮮明に捉え直すこと。

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問４　**【文章Ⅱ】**の傍線部（エ）「右三首のうち白秋と牧水の歌は、作りが似ている」とあるが、これらの作品の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 知覚した音の響きが視覚に変換され、リフレインを効果的に使うことによって、より実感的に音が表現されている。
② 知覚した音の響きそのものが言語化され、リフレインを効果的に使うことによって、音の拡がりが表現されている。
③ 知覚した音の響きそのものが言語化され、比喩表現を効果的に用いることによって、読者を異次元空間に誘っている。
④ 知覚した音の響きと実景が言葉によって融合し、対句を効果的に用いることによって、立体感ある情景が表現されている。
⑤ 知覚した音の響きが視覚に変換され、対句を効果的に用いることによって、音のうねりや拡がりが表現されている。

問５　**【文章Ⅰ】**と**【文章Ⅱ】**を踏まえて、「国語総合」の授業で次の短歌を鑑賞することとした。**【生徒たちの会話】**を読んで、後の（ⅰ）～（ⅲ）の問いに答えよ。

死に近き母に添寝のしんしんと遠田のかはづ天に聞ゆる　　斎藤茂吉『赤光』

【生徒たちの会話】

生徒Ａ　この短歌は母が危篤であるという知らせを聞き、東京から急いで故郷の山形へ戻った作者が、母を看病していた時の歌で、**【文章Ⅰ】**で取り上げている「触覚」と、**【文章Ⅱ】**で取り上げている「聴覚」のどちらにも関わる歌ですね。まずは「触覚」の観点でこの短歌を捉えてみるとどのようなことがわかるでしょうか。

生徒Ｂ　「触覚」を連想させる言葉は「添寝」ですね。一つの部屋の中で、隣に寝ている死に近い母に触れている作者の実体験が表現されていると思います。

生徒Ｃ　一方、「聴覚」に着目してこの短歌を鑑賞してみると、遠くの田で鳴く「かはづ」の生にあふれた声が響き合っている状況を表現していると考えられます。**【文章Ⅱ】**で紹介されている明るくダイナミックな「空の日に」の歌

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

とは対照的な世界が表れています。

生徒A　そうですね。しかし、私はこの短歌を詠んだとき、母と「かはづ」が同時に詠まれている意味がわかりませんでした。どのように考えたらよいでしょうか。

生徒B　私も同じような疑問を感じました。そこで私はこの短歌で使われている言葉について、もう少し調べる必要があると思い、「しんしんと」という言葉の意味を調べてみました。ある辞書には、

> **【意味１】**　あたりが静まりかえる様子
> **【意味２】**　寒さなどが身にしみ通るように感じられる様子

という意味が載っていました。

生徒C　私は「しんしんと」という言葉を使っている次の五首の作品を見つけました。

> ・しんしんと雪ふりし夜に汝(な)が指のあな冷たよと言ひて寄りしか　斎藤茂吉
> ・しんしんとゆめがうつつを越ゆるころ静かな叫びとして銀河あり　中畑智江
> ・大いなる岩を穿(うが)ちて豊かなり水しんしんと滝壺(つぼ)に入る　小松カヅ子
> ・暖かき小鳥を埋めるしんしんと雪ふればみな死なねばならぬ　黒崎由起子
> ・火のやうなひとに逢ひたししんしんとひとつの思想差し出(い)だしたし　永井陽子

「しんしんと」の言葉の**【意味１】**や、これらの作品と比較してみると、「死に近き」の短歌は、看病をしている部屋の中や屋外が静まりかえって夜が更けていく中で、遠くの田で「かはづ」が鳴いている情景を表現していることがわかります。

生徒B　確かにそのように捉えることもできますが、「しんしんと」の**【意味２】**を踏まえると、「**ア**」と**【文章Ⅰ】**にも書かれていたように、母の死を覚悟した作者の痛切な思いが身にしみ入っていく様子を表現しているとも捉えられます。

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

生徒Ａ　改めて二つの文章を読み返したり、皆さんの話を聞いたりして、私はこの短歌は［**イ**］により、生と死を象徴的に表した歌であると考えることができました。このように、五感に関わる視点や使われている言葉などに着目して短歌を鑑賞してみると、短歌に表れている場面や、その場面から想像できる作者の気持ちを多角的に読み取ることができ、深い鑑賞ができました。皆さん、ありがとうございました。

（ⅰ）**生徒Ｃ**が紹介した歌の中で使われている「しんしんと」について、**【文章Ⅱ】**で取り上げていた内容に最もふさわしいものは何か。次の①～⑤のうちから一つ選べ。

①　しんしんと雪ふりし夜に汝が指のあな冷たよと言ひて寄りしか　　斎藤茂吉
②　しんしんとゆめがうつつを越ゆるころ静かな叫びとして銀河あり　　中畑智江
③　大いなる岩を穿ちて豊かなり水しんしんと滝壺に入る　　小松カヅ子
④　暖かき小鳥を埋めるしんしんと雪ふればみな死なねばならぬ　　黒崎由起子
⑤　火のやうなひとに逢ひたししんしんとひとつの思想差し出だしたし　　永井陽子

（ⅱ）**生徒Ｂ**の発言の**空欄ア**に**【文章Ⅰ】**の中の一文を入れる場合、どのような表現が入るか。最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

①　触覚が本当に生きている歌というのは、視覚や聴覚の歌に比べると思いのほか少ない気がする
②　短歌でも、何かに「触れる」という歌はたくさんあるけれど、それがすなわち触覚の生きた歌だとは限らないのだ
③　神経が昂ぶっているときの、異様に研ぎ澄まされた感覚だろう
④　視覚なら今は写真や映像があるし、聴覚ならさまざまの音源があるが、触覚は基本的に「記録」できない
⑤　触れることが命の輪郭をなぞり直すことだとしたら、それは他者の命についても同じだ

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

（ⅲ）　生徒たちの会話を踏まえて、**生徒Ａ**の発言の**空欄イ**に入るものとして最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。

①　添寝という空間的表現と、かはづのこえという聴覚的表現とを交差させること
②　死に近い母の命の感触と、天から降り注ぐように聞こえるかはづのこえを重ね合わせること
③　添寝によって実感する母の命と、夜の静寂の中に響くかはづの声とを対比させること
④　母に添寝をしている自己の視点を、かはづの声にあふれた遠田に転換させること
⑤　死にゆく母に添寝する部屋の静けさを、遠田で鳴くかはづの声によって強調させること

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第一講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●高村光太郎＝たかむら　こうたろう（一八八三〜一九五六）彫刻家であり詩人でもある。東京生まれ。東京美術学校（現在の東京芸術大学）彫刻科卒。代表作『智恵子抄（ちえこしょう）』『道程（どうてい）』

●斎藤茂吉＝さいとう　もきち（一八八二〜一九五三）精神科医であり歌人でもある。山形県生まれ。東京帝国医科大学（現在の東京大学医学部）医学科卒。代表作『赤光（しゃっこう）』『あらたま』

●北原白秋＝きたはら　はくしゅう（一八八五〜一九四二）詩人・歌人。早稲田大学英文科予科中退。詩集の代表作『思ひ出』

●若山牧水＝わかやま　ぼくすい（一八八五〜一九二八）歌人。宮崎県生まれ。早稲田大学英文科卒。代表作『別離』『海の声』

●島木赤彦＝しまき　あかひこ（一八七六〜一九二六）歌人。長野県生まれ。長野師範（現在の信州大学教育学部）卒。

語句

根源＝こんげん→ものごとのおおもと・始原

象徴＝しょうちょう→あるもので別のあるものを指し示すこと。とくに具体的なもので抽象的なものを指し示すこと

観念＝かんねん→頭の中のアイディアや思想、考え

花冷え＝はなびえ→桜が咲くころに寒さが戻ること

侘しい＝わびしい→心細く、たよりないこと。物悲しいこと

儚さ＝はかなさ→内容がない。しっかりしておらずたよりない。あっけない

アクロバティック→曲芸のような

リフレイン→繰り返し

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

しどろもどろ→秩序なく乱れること・とりとめのないこと
降誕祭＝こうたんさい→クリスマスのこと　ニコライ堂は日本ハリストス正教会の教会
索漠＝さくばく→ものさびしい様子・気が滅入る様子
対句＝ついく→意味上は対比（対照）的な句を連ねること。その際、形式や語句の並びや品詞を共通にする。『広辞苑』では次のような例が出ています
例　魚は水に飽かず。魚にあらざれば、その心を知らず。鳥は林をねがふ。鳥にあらざれば、その心を知らず。

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第一講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）触覚は人間の根ゲン的な感覚　①現　②限　③減　④厳　⑤源

（イ）豊かなショウ徴表現に満ちた詩　①省　②象　③章　④祥　⑤衝

（ウ）頭の中のカン念を言語化する　①勘　②感　③観　④環　⑤敢

（エ）横顔の輪カクを丁寧に描く　①角　②核　③画　④郭　⑤確

（オ）文学的な表現に感タンする　①嘆　②単　③胆　④端　⑤鍛

（カ）諦めないでチョウ戦する　①超　②挑　③兆　④跳　⑤眺

（キ）若い彫コク家の作品を展示　①酷　②剋　③告　④刻　⑤哭

（ク）優しい言葉がキン線に触れる　①金　②近　③筋　④襟　⑤琴

（ケ）騒音がシン経を逆なでする　①神　②心　③芯　④信　⑤深

（コ）相手の申し出をキョ絶する　①虚　②巨　③拒　④居　⑤距

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第２講の予習の前に、第２講チャプター１を視聴しよう！

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

テキスト解答・解説

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

誤りの選択肢の典型例一覧　〈誤りに名前をつけられるほどのパターンがある！〉

1 **対比混乱の誤り**……本文中で**対比・区別**されていることばを同種のものとして扱ってしまっている誤り。あるいは、主役キーワードの説明を求めている設問で、敵役キーワードを挙げている誤り。**キーワードのグループ分け失敗**の選択肢といってもいい。

2 **同一性分断の誤り**……本文中で同種のことばを対比であるかのように扱ってしまっている誤り。これも**キーワードのグループ分け失敗**。**同質性分断**ともいう。

3 **正しい対比喪失の誤り**……本文中で「**A⟷B**」という対比で記述されているのに、無関係な「C」という要素を勝手にもちこんだり、「**C⟷D**」といった本文にない対比をもちこんでいる誤り。例えば、本文は「**善⟷悪**」という対比で書いているのに、「美」や「醜」という無関係な対比をもちこみ、本文の正しい対比を見失っている誤り。

4 **不当な全称判断**……本文中の記述がないのに、「**すべての○○は**」「**あらゆる○○は**」と勝手に拡張している誤り。類似した誤りとして**不当な一般化**があります。例えば本文では「バラ」という個別のものに焦点を当てているのに、「花というものは」などと拡張している誤り。

5 **不当な限定判断**……本文中の記述がないのに、「**○○のみ**」「**○○だけ**」と勝手に縮小してしまっている誤り。類似した誤りとして**不当な矮小化**があります。例えば本文では「人間関係全般について」書いてあるのに、「近所づきあい」の次元を書いている選択肢。話を不当にちっぽけにしているわけです。

6 **不当な価値判断**（不当な当為判断）……本文では「○○である」「○○だ」という事実判断をしているのに、「**○○であるべきだ**」「**○○にしなければならない**」「**○○する必要がある**」と勝手に改変してしまった誤り。またAとBの特徴の比較をしているだけなのに、**Aのほうが優れているといった優劣を持ち込んだ**選択肢の誤り。特に論文を読んだり書いたりする上で、「事実判断と価値判断（当為判断）」との違いには気を遣う必要があるんだよ。

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

7 **部分的指摘の誤り**……本文中では、「AともにB」「Aと同時にB」「AしかもB」と追加表現がなされているのに、「A」だけ、あるいは「B」だけを扱ってしまっている誤り。本文の記述にまったく反しているわけではないため、「高度な」誤りといえます。こういうものに気づけるようになることが、現代文での高得点のカギだよ。

8 **記述に反する誤り**……文字通り、本文中の記述に真っ向から反する選択肢。例えば本文では「AはBである」としているのに「AはBではない」としている誤り。

9 **記述なし**……文字通り、本文中の記述にはいっさい書いてない内容を勝手にのせている選択肢。ただし、「本文の記述に反しているものを選びなさい」といった間違い探しの設問のとき、本文には書いてないだけで、間違いとはいえないということがあるから注意。つまり、「誤り」としては1〜8・10〜13のほうが深刻な誤りといえ、そちらを優先する。

10 **文脈喪失の誤り**……文章中で特定の意味づけをして使っていることばを、**文脈外の「常識」や辞書的な意味**で扱ってしまっている誤り。例えば、「飛躍」ということばを、本文は「行き過ぎ」「誤解」という意味付けをして記述しているのに、勝手に「発展」「前進」というようにとらえてしまっているもの。

11 **物理的スリカエの誤り**……**心理や気持ちを問うている設問で、物理的に説明している選択肢。**小説問題の選択肢としてよく出ます。例えば「暗い気持」を天候や日照量の説明にしてしまっている誤り。

12 **比喩を文字通りに解釈した誤り**……本文中で、たとえになっている表現（擬人法もふくむ）を文字通りにとってしまった選択肢の誤り。比喩は立派な表現技法です。これをリアルに解釈するとずいぶんおかしなことになります。例えば「いやー、歩きつかれちゃって、膝（ひざ）がわらってるよ」なんて表現があるけど、ホントに笑ったら怖い！

13 **具体例は、一段、落ちる**……具体例を挙げている選択肢は、「最も適当」な選択肢を選ぶ際には、選びたくない（ガクっと正解候補から落ちるイメージ）。もっとまとまった語句を盛り込んでいる選択肢が正解になる。

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第一講　マーク式　その1
《評論》テーマ「日本文学論・短歌論」

問1《慣用句・選択肢》

文中に登場した慣用句など語彙力を三つ問う形式は、センター試験の小説にて行われてきたものと同一形式です。「本文中における意味として最も適当なもの」という問い方も同じです。ただし「本文中における意味」といっても、文脈ならではの特殊な意味づけがされたものを問うているのではありません。そういう問いは問2以降です。ここでは、文脈に沿いながらもあくまで慣用句の知識問題になっています。この点でも、センター小説と変わりありません。

（ア）「琴線（きんせん）」は感じやすい心情、心の奥に秘められた、感動し共鳴する心情のことです。そこに「触れる」とは、そうした心情を呼び覚まし、感動や共感を与えることです。琴線は、もともと楽器の琴（こと）の糸、つまり弦（げん）で、ここがつま弾かれ、ふるえることで共鳴し音が広がります。人間の心も似ているということでしょう。ちなみに⑤「怒りを買ってしまう」は「逆鱗（げきりん）に触れる」という慣用句の意味です。

（イ）「時雨（しぐれ）」は、④「秋の末から冬の初め頃に、降ったりやんだりする雨」です。いわゆる通り雨で長時間の土砂降りにはなりません。①「春の、特に若芽の出る頃、静かに降る細かい雨」は春雨（はるさめ）のことです。②「昼すぎから夕方にかけて、急に曇ってきて激しく降る大粒の雨」は夕立（ゆうだち）です。急に降ってきて、間もなく止むという点では俄雨（にわかあめ）、驟雨（しゅうう）という表現もあります。熱帯ならスコールです。③「一しきり強く降ってくる雨」は篠突く雨（しのつくあめ）です。⑤「みぞれに近い、きわめて冷たい雨」は氷雨（ひさめ）です。参考までに、五月雨（さみだれ）は、旧暦の五月ごろに降る長雨で、ほぼ梅雨（つゆ（ばいう））と考えてよいです。このように日本語には雨にまつわる表現が多彩にあります。季節変化や地理的特性から日本では何に関心を抱き、美的感受性を磨いてきたかがわかります。みなさんも文化的教養として知っておきましょう。

（ウ）これは反語という表現です。おいしいものを食べて、「うまいと言わずにおれるか」と表現するのと同じです。「あたわざる」は「不能」を書き下しにした、漢文由来の表現です。ただしここでは、単なる打消しではなく、反語で、「〜ないのか、いや〜だ」の意味になります。文脈では「ニコライ堂〜」の歌の直後にある「初めてこの歌を知ったとき、文字通り感嘆した」

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

がヒントになります。①「感嘆せずにはいられないこと」が正解です。②「感嘆してはいられないこと」、③「感嘆する余裕がないこと」、これらでは、感嘆していないことになります。×です。④の「感嘆するか迷ってしまうこと」はどうか。迷わず感嘆する状態が「感嘆おくあたわざる」です。⑤の「感嘆することもありうること」も似ていますね。ありうるどころか、もれなく感嘆せざるを得ないという意味ですよ。×です。

問２《空欄補充・選択肢》

センター試験の現代文ではなかったタイプの設問です。ただ空欄の前後から根拠を見つけて解答することは十分に可能です。まず**【文章Ⅰ】**は、触覚重視の短歌を取り上げて論評している文章です。空欄の直前も同様です。また空欄［１］・［２］と「いちじくの～」の三つの短歌に関する直接の解説が、それらの直後にあります。

「生きている／生きていた命に触ることとは、しばしば怖れや気味の悪さを伴う。それぞれ動詞がリアルに効いていて、日常の破れ目が見えるような怖さがある」がそれです。これに合致しているのが、②「**ぬめっとるまなこに指をさし入れてゆびが魚をつきやぶるまで**」と⑤「遠くまで来てしまひたり**挽き肉に指入るる**とき今も目つむる」です。太字にしたところが、いかにも触覚的ですね。

では、他の選択肢を吟味します。①「悲しみの単位として**指さす**川にはなみずき散りやんでまた散る」の「指」は触覚ではなく、むしろ視覚ですね。指をさして見ている川や、はなみずきという花の方角をさしているのですから。名付けて対比混乱の誤りです。この点では⑥「風よりも静かに過ぎてゆくものを**指さす**やうに歳月といふ」もまったく同じ間違いです。

③「**触れる**ことは届くことではないのだが**てのひらに蛾を移して**遊ぶ」はどうでしょう。「触れる」「てのひら」という言葉は出てきますが、蛾に触った感覚、なまなましい感覚についてはノータッチです。それでは正解になりません。あえて言えば、てのひらの蛾を見て短歌にした視覚的な歌です。その点では対比混乱の誤りです。

④「**足のゆび**はおろかにし見ゆ湯あがりの一人しばらく椅子にゐたれば」はどうか。「足のゆび」とありますが、これで何かを踏んづけているわけでも、ゆびで挟んでいるわけでもありません。椅子に座って足のゆびを見ている歌です。つまり、これも対比混乱の誤りです。

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問３《要旨説明・選択肢》

【文章Ⅰ】の最大キーワードである「触覚」についての説明を求めています。この「触覚」については、本文中のあちこちに頻発しますが、とくに最終段落にまとまっています。とくに重要箇所を拾っておくと、「ひとつひとつの何でもない場面が、触覚を経由することでひりひりと印象づけられる」「つまるところ、触覚にはやはり体験の一回性の力強さがある気がする」「さまざまなものに触れながら生きている自分の輪郭を新鮮に確かめ直す」などがあります。これに合致するのが、⑤「直接触れる実体験を通して、何気ない生活場面や自らの存在を鮮明に捉え直すこと」です。もちろん、一字一句たがわず一〇〇％本文と一致ということではありません。言い換えを含みますが、意味内容として同じであればよいと考えます。こういう点では、実は基本的な語彙力が問われると言えます。

他の選択肢を吟味しましょう。①は、まず「生きているものに触れることの恐怖感や不気味さを克服して」が誤りです。子供の成長の話ではありませんよ。「克服」ではなく、むしろ「恐怖感や不気味さ」を歌で表現するのです。記述に反する誤りです。また、「その真の姿を知ること」も間違いです。〝真の姿↔仮の姿・ニセの姿〟などという対比はありません。あるのは〝触覚↔視覚・聴覚〟という対比です。したがって、正しい対比喪失の誤りです。

②は、まず「記録する媒体に頼ることなく」が×です。本文には「触覚は基本的に『記録』できない」とあります。記述に反する誤りです。また「たった一度の経験を自ら記憶し続けること」も×です。本文によれば「触覚を、言葉によって再現してやろうという挑戦」です。記憶ではなく、歌にするのです。記述に反する誤りですね。

③は「自他が一体化した感覚」が×です。本文に「自分と異なる他者に触れたときに触覚を意識する」とありますが、「一体化」ではありません。記述に反する誤りです。

④は「視覚や聴覚による認識をこえて」が×です。〝触覚↔視覚・聴覚〟という対比ではありますが、どちらかがどちらかを超越するという話ではありません。どちらかが優れているわけでもありません。日本文化と欧米文化を比較する文章もよくありますが、特徴の比較をしているだけで優劣を論じているわけではない文章がほとんどです。こういう間違いを不当な価値判断と言います。また、「対象の本質に深くせまろうとする」も、①の「真の姿」に似た間違いです。第一段落に「根源的」「根源性」という表現はありますが、「本質」とはありません。根源性は「幼稚」ということばともセットで使われています。ちょっと補っ

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

て説明すると、オギャーと生まれてまだ目も開かない赤ちゃんのころから触覚は働いている、人間という生命にとってまず最初に原初的に機能するものが触覚ということです。本質か本質でないか、重要か重要でないかの比較ではありません。**正しい対比喪失の誤り**です。

問４《傍線部説明・選択肢》

まずそれぞれの歌の直後にある解説のことば、「繰り返し」が共通点です。さらに傍線部直後の「三次元空間をもたない」「言葉の組み立ては三次元的ではない」「歌全体が聴覚と化したようで、響きそのものになって拡がっていくようだ」が根拠になって、②「知覚した音の響きそのものが言語化され、リフレインを効果的に使うことによって、音の拡がりが表現されている」が正解です。「リフレイン」は繰り返し・反復法のことです。①も「リフレインを効果的に使うことによって」は同じなのですが「知覚した音の響きが視覚に変換され」が×です。「視覚」では**対比混乱の誤り**です。

他を吟味します。③は、まず「比喩表現」が×です。二つの歌に「比喩」はありませんし、文中の解説にもありません。**記述なし**です。さらに「異次元空間」が×です。それは、傍線の「白秋と牧水の歌」と比較されている茂吉の歌のキーワードです。**対比混乱の誤り**です。

④はどうか。まず、「知覚した音の響きと実景が言葉によって融合」が×です。**記述なし**です。次に「対句を効果的に用いる」が×です。対句ではなくリフレイン（繰り返し・反復法）です。対句というのは、意味上は対比（対照）的な句を連ねる技法です。白秋の短歌にある「大きあり」と「小さきあり」は、たしかに対になっていますが、「大きあり小さきあり」でひとかたまりです。これをAとします。次の「小さきあり大きあり」をBとします。大小の語順こそ入れ替わりますが、基本的に繰り返しです。対句ではありません。牧水の短歌に見られる「青々と海鳴る」と「あはれ青き海鳴る」も全く同一語句のリピートではありませんが、基本的にリフレイン・反復法です。例えば「青々と空鳴る　黒々と陸黙る」だったら対句です。さらに「立体感」も×です。「三次元的ではない」でした。**記述に反する誤り**とも言えるし、視覚になってしまっている点では、絵に描いたような**対比混乱の誤り**です。

⑤は「知覚した音の響きが視覚に変換され」がいきなり×です。**対比混乱の誤り**の典型です。視覚でなく聴覚でしたね。さら

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

に「対句」も×です。記述に反する誤りです。

問５

（ⅰ）《内容一致・選択肢》

「**【文章Ⅱ】**で取り上げていた内容」とは、聴覚重視の歌でした。したがって、二種類ある「しんしん」のうち、**【意味１】**の「あたりが静まりかえる様子」に当てはまるものが正解となるはずです。③が正解です。大きな岩に穴をあけるほどの水量で滝が落ちる。まわりは「しんしんと」静かな中で水音が響くということでしょう。①は「雪ふりし夜」「あな冷たよ」とありますから、**【意味２】**の「寒さなどが身にしみ通るように感じられる様子」の方ですね。②はどうか。「静かな」という語句がありますが、肝心の「しんしんと」が掛かっているのは「ゆめがうつつを越ゆるころ」です。つまり夢の世界がしだいに現実世界（うつつ）を超越して、体の中、意識の中に浸透してくるときのことです。したがって、**【意味２】**の方です。「寒さなどが身にしみ通る」とあるように「しみ通る」ものは「寒さ」に限定されません。④は「暖かき」と対比であること、「雪ふれば」ですから**【意味２】**の方です。⑤も「思想」ですので、聴覚ではなく「身にしみる」ほうです。

（ⅱ）《空欄補充・選択肢》

空欄後の「母の死を覚悟した作者の痛切な思いが身にしみ入っていく様子」が根拠になり、⑤の「触れることが命の輪郭をなぞり直すことだとしたら、それは他者の命についても同じだ」が正解です。人間の生命や生き死ににふれているのはこの選択肢だけです。①に「生きている」という表現がありますが「触覚が本当に生きている歌」という文脈ですから、この「生きている」は効果的という意味です。②の「生きた」もこれと同じです。③と④に、生命・生き死にはありません。

（ⅲ）《空欄補充・選択肢》

【文章Ⅰ】＝触覚の歌、**【文章Ⅱ】**＝聴覚の歌の総合です。さらに「しんしんと」の**【意味１】**＝あたりの静けさと**【意味２】**＝身にしみ通るの総合です。したがって、③「添寝によって実感する母の命と、夜の静寂の中に響くかはづの声とを対比させる

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

こと」が正解です。

模範解答

問１　（ア）＝③　（イ）＝④　（ウ）＝①　問２　②・⑤（順不同）　問３　⑤

問４　②　問５　（ⅰ）＝③　（ⅱ）＝⑤　（ⅲ）＝③

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題解答

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第一講　模範解答

（ア）⑤　（イ）②　（ウ）③　（エ）④　（オ）①
（カ）②　（キ）④　（ク）⑤　（ケ）①　（コ）③

解答漢字一覧

（ア）根源　（イ）象徴　（ウ）観念　（エ）輪郭　（オ）感嘆
（カ）挑戦　（キ）彫刻　（ク）琴線　（ケ）神経　（コ）拒絶

© RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。